

大型トラック タイヤ 怖い

事故
急増中

重さ1000kgのゴムの塊が
猛スピードで飛んでくる

の ほど ものはない

大型トラックのタイヤは、安定して長い距離を転がる



トラックからタイヤが脱落すると、予測不可能な動きで転がり、周囲を襲う巨大な凶器と化す。実際、「明日は我が身」と思わせるような事故が多発しているのだ。いつ巻き込まれても、おかしくはない。

まさに『空飛ぶタイヤ』

午後6時30分を回った頃。愛知県蒲郡市内の国道23号線は、山間を通る片側一車線の窮屈な道路だ。国道を隣町へ向かって西走していた神奈川県在住の50代男性Aさんを、突然の不幸が襲う。対向車線走る大型トラックからタイヤが外れ、自家用車のフロントガラスに直撃したのだ。

走行中に外れた右後輪は、転がりながら対向車線に進入。直径約1m、重さ約100kgのタイヤはフロントガラスに激突後、車を持ち越えるように後方に飛んでいき、Aさんの車から2台後方を走る車にも接触した。Aさんは、頭部を打撲した

ものの軽傷で済んだ。

今年6月24日に起こった交通事故の話である。「タイヤの当たりどころが悪かったら、運転者は亡くなっていたでしょう」(捜査関係者)

タイヤのナットが緩み、ボルトに負担がかかって折れたことが脱輪の原因だとみられている。「Aさんの乗用車は大破し、走行不能に。ちょうど運転席の部分にタイヤがぶつかったため、被害者の救出にも時間がかかりました。乗用車が中型のSUVタイプだったことが不幸中の幸いでした。軽自動車だったら、軽傷では済まなかったでしょう」(前出・捜査関係者)

なにせ、重さ1000kgのゴムの塊が猛スピードで飛んできたのだ。Aさんは、まさに九死に一生を得たのである。

だが、他人事ではない。実は、大型車のタイヤ脱落による事故は急増している。国土交通省の調べによると、昨年度は67件。11年には11件だったというから、6年で6倍超に増えている。しかも、脱落する8割強が「左後輪」だという。

タイヤの脱落といえ、'00年代前半に三菱自動車製の大型トラックの部品「ハブ」が相次いで壊れた問題が大きな社会現象となった。「三菱リコール隠し」だ。この事件を基にした池井戸潤氏の小説『空飛ぶタイヤ』が、今年6月に映画化されたことも記憶に新しい。

作品でも描かれた、脱輪による凄惨極まる死亡事故は実際に起きた出来事がベースになっている。えていう原因として、輸送業界の人手不足も挙げられます。また、ハンドルの大きく切る左折時に、左後輪に大きな負担がかかるため、脱輪が増えるのです。

わが家に突っ込んできた

では、三菱の不祥事に

よって一時は減少傾向にあった脱輪事故が、なぜここ数年で急増したのか。国土交通省自動車局整備課の担当者は、データを基にこう語る。

「実は、事故は積雪地域が多い。67件のうち37件が北海道・東北・北信越で起こっています。しかも、11月から2月までの期間に集中している。その原因は冬用タイヤに交換する際の作業ミスと考

えられています。

ここ数年は、異常気象により記録的な大雪が多発し、急に雪が降ることがありました。それで慌ててタイヤを交換するなかで、ホイールナットの締め忘れなどの作業ミスが発生し、事故が急増したのではないかと推測しています。

つまり、これからの季節が特に危ないわけだが、正直、気を付けようがない。後続で走っていると

大型トラックのタイヤほど怖いものはない

事故急増中

きのみならず、歩道を歩いていて突然後ろからタイヤに襲われるなど、誰が想像できるだろうか。それどころか、家の中にいるにもかかわらず被害にあった人もいる。

今年の7月5日、青森県黒石市内の県道を走っていた大型トラックの左後輪タイヤ2本が時間差で脱落。最初の1本は対向車線を行って来た乗用車に接触した後、そのまま歩道に乗り上げた。もう1本は県道を約300m進んだ付近で脱落。そのまま転がり続け、県道沿いの店舗のガラス戸に



大型トラックから脱落して、衝突したタイヤ

衝突したのだ。

当時、店舗にいたBさんが振り返る。

「タイヤが飛び込んできたのは午前9時過ぎのこと。私は店の奥でテレビをのんびり見ていました。突然『ガシャン！』という大きな音がして飛び起きました。タイヤがガラス戸に衝突し、割れていました。」

警察によれば、タイヤ

を固定するボルトが金属疲労で劣化し、破断にいたったようです。そのトラックは大量の杉の丸太を積んでいました。ところが、丸太は伐採したばかりで水分を含んでいた。おそらく重量オーバーでしょう。本来、もっと乾燥させてから運ぶべきだったと思います。」

脱落したタイヤは、重さ約100kg、人の腰ほどの高さはある巨大なものだったという。市街地で、さほど速度が出ていなかったせいかな的な被害は起きなかったのが、

不幸中の幸いだ。

「最初に『バーン！』という大きな音がして、次にガラスが割れる音がしました。最初の音はトラックのシャフト（タイヤを支える車軸）が落ちた音だと思っています。運転手はすぐに出てきましたが『やつてしまった』と顔面蒼白。かなりうろたえた様子でした。すぐ現場に駆けつけたのが、トラ

ックメーカーの社員です。さらに警察がやってきて、3人がかりでタイヤを警察車両に運んでいました」（目撃者）

トラックがもう少しスピードを出していれば、Bさんの店舗は大破し、中にいたBさんの命を奪いかねなかった。学校の登下校の時間に起これば、被害はさらに拡大したかもしれない。

誰の責任になるのか

タイヤ脱落事故を起こした運転手に話を聞いたことがある自動車修理工場の関係者はこう語る。「彼は『何が起きたかわからなかった』と言っていました。なので、タイヤが外れた直後は『誰かにぶつかったらどうしよう』という思いには至らないそうです。それほど気づきにくい。」

それに、脱落するタイヤのほとんどが後輪です。違和感を覚えたとし

ても、確認することができない。しかも高速道路だと、車両をすぐ止めるわけにもいきません。しかし、脱輪状態で走り続けていると、突然ガタガタと揺れます。そこで、道路脇に寄せて、ようやく気付くこともあるようです。」

トラックの脱輪事故が起こった場合、誰の責任が問われるのか。高山法律事務所の高山俊吉弁護士はこう語る。

「基本的には道路交通法71条によって運転手に責任があるとされます。しかし、運送会社として点検できる体制になっていないのか検証されないまま、運転手の責任だけが追及されて幕引きされていることが多い。点検に関する社内態勢に不備があれば、事業者や整備管理者などの非が問われることもありえます。また、もともとリコールを必要とするような構造上の欠陥がある車だったのであれば、メーカーの責任が問われます。」

先に紹介した岐阜の事故では、後輪に異常を感じながらも運転を続けたとして運転手が自動車運転処罰法違反容疑、過積載を指示したとして運送会社の社長が道路交通法違反、整備士2人が業務上過失傷害容疑と、計4人が書類送検されている。大型トラックが側を通るときは、タイヤから目を離してはならない。